

Confronting "an Unknown Vaccine" with  
Behavioral Economics

佐々木周作  
大竹文雄  
齋藤智也

行動経済学で

「未知のワクチン」

に向き合う

ワクチン  
接種は  
ナツギ  
すべきか？

# プロローグ

佐々木周作



©Tezuka Productions

漫画家・手塚治虫の作品『陽だまりの樹』には、このような場面が描かれている。2コマ目の後ろ姿は、大阪大学の原点の一つである「適塾」を設立した、江戸時代後期の蘭学者・緒方洪庵のものである。6世紀以降、日本でもたびたび流行してきた天然痘に対する免疫を獲得するために、洪庵らは1849年開設の大阪・除痘館を拠点として、牛の天然痘とされる牛痘にかかった子どもにできた膿を、天然痘にまだかかっていない子どもに接種するという「牛痘種法」を広めようと奔走した。従来、天然痘に対しては、牛痘でなく天然痘そのものに罹患した人にできたかさぶたから、吸入や接触などで感染させて抗体を得ようとする「人痘種法」が試みられていたが、技術的な困難さから逆に感染や流行の拡大につながることもあって、

定着しなかった。牛痘種法は人痘種法に比べて安全性が高く、英国の医師エドワード・ジェンナーが1790年代に手法を確立して以降、世界で一気に広がった。日本で牛痘種法が始まったのは世界に50年ほど遅れたことだったが、当初は牛由来という奇妙な手法への抵抗感が強く、『陽だまり樹』で描かれていたように「接種を受けると牛になる」などの風評も広まって、なかなか信頼してもらえなかったという。

このような啓発に関わる苦勞を、洪庵は『除痘館記録』で次のように書き記している。

「市中には牛痘は益がないばかりでなく、かえって小児の体に害があるというような悪説がながれて、誰一人牛痘を信ずるものがいなくなつた。やむを得ず、少なからぬ米錢をついやして種痘日に四、五人の貧しい小児を集めたり、四方へ走りまわつて、牛痘のことを説明して勧めたりして、三、四年に及び、ようやく再び信用されるようになった。その間に社中各自が辛苦艱難したことはとても書きつくせない」  
〔梅溪昇『緒方洪庵』（吉川弘文館、2016年、172ページ）掲載の現代語訳より一部調整〕

牛痘種法は、接種を受けた子どもにできた膿から漿液を採取して別の子どもに植え継ぐという形式だったので、接種者が継続しないと、痘苗が途絶えることになる。そこで、痘苗が途絶えないよう、「少なからぬ米錢」という経済的インセンティブを活用して維持した様子がここに書かれている。洪庵らは、その他にも「引札」というチラシを発行して、牛痘種法の仕組みや安全性、接種後の生活の注意点などを一般の人たちが理解できるように説明した。引札には、次ページの「種痘啓発錦絵」のようなものもあつた。天然痘の守り神である牛痘児が白い牛にまたがり、種痘針になぞらえた槍で疫鬼を駆逐する様



種痘啓発錦絵（所蔵者の許諾を得て掲載）

子を描いたもので、勇敢な姿を見せることで子どもたちの接種意向を高める目的もあったと考えられる。

洪庵らの創意工夫に基づく実績が認められて、設立から10年ほど経った1858年に除痘館はようやく官許を得て、幕府公認の施設となった。それから約百年の歳月を経て、1956年以降、日本では天然痘の発生がなくなつた。80年には、世界保健機関（WHO）が天然痘の根絶を宣言した。

天然痘は、現時点において、人類によつて根絶された唯一の感染症である。

### 牛痘種法と新型コロナ・ワクチン

本書の著者の一人である私・佐々木周作は、以前から手塚治虫の『陽だまりの樹』を愛読していた。新型コロナのパンデミックの最中に読み返したとき、緒方洪庵の奮闘のくだりがおよそ昔の出来事には思えなかつた。パンデミックで目の当たりにしていることと、ほとんど同じことのように感じられたからだ。

「接種を受けると牛になる」という風評は、「ワクチンにマ

イクロチップが入っていて、管理される」や「ワクチンを打つと、腕に磁気が帯びて、磁石や金属がくっつくようになる」など、新型コロナウイルス・ワクチンにまつわる誤情報や都市伝説と通ずるところがある。

「引札」でわかりやすい情報発信に努めたり「種痘啓発錦絵」で接種を促したりする工夫は、新型コロナウイルス・ワクチンに関する各国政府の情報発信や、たとえば、「ワクチン接種を受けて、ヒーローになる」という米国の市民向けメッセージ、英国エリザベス女王のような著名人らが率先して接種を受けて人々にも呼びかけた取り組みなどと通ずるところがある。

これらの共通点を指摘することで、私は、人類に学びや成長がないと主張したいわけではない。むしろ、パンデミックが発生する度に、新しいワクチンに戸惑うことの方が当たり前なのだと思う。牛痘種法は、漿液を種痘針につけて、上腕の表皮直下に小さい傷をつけてすり込むということを5〜6カ所やる。抵抗感を覚える方が普通だ。新型コロナウイルスのパンデミックでは、「mRNA（メッセンジャー・アー・ル・エヌ・エー）ワクチン」という新しい科学技術が採用されて、通常よりはるかに短期間で開発され、社会に導入された。これまで実装されることがない科学技術に対しては、不安を感じる方が普通だ。したがって、これらを受け入れてもらえるように政府などの機関が創意工夫を凝らして人々に働きかけることもまた、パンデミックの度に毎回必要になるはずだ。

### 「未知のワクチン」と行動経済学

新型コロナウイルスのパンデミックの初期、私は行動経済学者として、本書の共著者でもある大竹文雄先生とともに、人々が自らソーシャル・ディスタンスをとったり感染予防に努めたりしようと思えるナッジの

研究開発に取り組んでいた。人間の意思決定の特性をふまえて自発的な行動変容を後押しするコミュニケーション手法を、行動経済学ではナッジと呼ぶ。研究の結果、「あなたが外出をやめ、『3密』を避け、手洗いやマスクをすることで、身近な人の命を守れます」という利他性に訴えるナッジ・メッセージが、「あなた自身の命を守れます」という利己性に訴えるメッセージなどと違って、実際に人々の外出控えを促進する効果を持つことがわかった。一方で、この促進効果は短期間しか続かないこともわかり、人々の行動変容だけに頼り続けることの難しさも露呈した。この発見から私は、人々の行動変容で感染状況をコントロールできてきている間に、感染症対策として機能する科学技術の人々が早く受け入れて、人々の行動変容に大きくは依存せずに感染状況をコントロールできる段階に移行する必要がある、と考えるようになった。ワクチンはその科学技術の筆頭候補だった。

しかし、行動経済学の観点から考えると、新しく開発されたワクチンを人々が受け入れる過程がスムーズに進むとは到底思えなかった。そもそも人間は、「未知なるもの」を避けたがる傾向を持っているからだ。曖昧性回避と呼ばれるこの特性は、たとえば、赤玉50個と白玉50個の入った箱Aと、赤白の比率が不明な箱Bがあつて、赤玉を引けば1万円もらえる状況だと、多くの人は当選確率の明らかかな箱Aから引きたいと思ひ、当選確率が曖昧な箱Bを避けたがる、という現象として捉えられてきた。新しく開発されたワクチンは、予防効果が得られる確率も、軽度なものであれ重篤なものであれ、副反応が現れる確率も、かなり曖昧に感じられるものだろう。

確率が明らかになつたとして、その確率の数値そのものに対しても人間は特徴的な反応をする。ノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマンらが提唱したプロスペクト理論では、人が微小な確率を過

大に評価する傾向を持つことが指摘されている。重篤な副反応が現れる確率が客観的には0・0005%と極めて小さい数値だったとしても、主観的にはもっと高く、たとえば5%くらいの水準で感じられるかもしれないということだ。このように、行動経済学は不確実な状況での人間の意思決定を研究し、他にも、損失を極端に嫌う損失回避や、それゆえに現状を変更する方が望ましい場合でも現状の維持を好む現状維持バイアスを発見してきた。たとえば、発熱などのかなりの頻度で現れる副反応による損失を気にして接種をためらうというように、それらの多くは「未知のワクチン」の接種を人々がひとまず様子見するように働くだろうと予想されるものだ。さらに、ワクチン接種の意思決定には、副反応の確率だけでなく、予防効果を得る確率、そもそも新型コロナウイルスに感染する確率など、さまざまなリスクが絡み合っていて、それらの交互作用としてワクチン接種を受けるかどうかはどう影響するかは複雑になってくる。

行動経済学は、現在と将来など、異なる時点間の意思決定の特性についても研究を重ねてきた。その発見をふまえると、人々が「未知のワクチン」の曖昧性や不確実性を何とか乗り越えて、接種を受けようという意向を持ったとしても、その意向通りに接種を受けられない人たちが出てくるだろうと予想された。人間は、遠い将来の計画を立てるときには理性的に選択をしようとするが、いざその計画を実行する段階になると、目の前の誘惑に負けて後回しにする傾向を持っているからだ。たとえば、「1年後、1万円受け取る」と「2年後、1万1000円受け取る」のではどちらがいいか聞かれると、冷静に金額の高い1万1000円を希望する人でも、「今すぐ、1万円受け取る」と「1年後、1万1000円受け取る」だと目の前の誘惑に負けて1万円の選択を実行してしまう。行動経済学では、この



ような意思決定の癖を現在バイアスと呼ぶ。現在バイアスの強い人は計画を後回しにしがちで、積極的な医療・健康行動をとりたいと思ってもなかなか実行できないことが知られていた。ワクチン接種を受けたいと思っても、今すぐ受けるかと言われるとすぐには実行できない人がきつと多いはずだ。

他者や社会のことを人間がどう配慮して意思決定するかも、行動経済学の主要な研究トピックだ。先に触れた利他性は、専門的に言うとは他者の効用水準が自分の効用関数に含まれることで、他者の喜びを自分の喜びのように感じる性質である。不平等回避は、他者と自分の間に差があることを嫌がり、平等を好む性質で、これが他者と同じように振る舞うことで安心するという同調性につながり、逆に他者と同じように自分も振る舞わないと、守るべき社会規範を守れていないかのような居心地の悪さを感じるようになる。利他性は、他者や社会を守るために自ら接種を受けようという方向に働くと考えられる一方、自分以外の人が接種を受けて他者や社会が守られることから喜びを感じるので、そういう場合には自分は接種を受けなくていいという方向にも働きうる。同調性は、周囲の大部分の人が接種を受けているときには自分も接種を受けようと思うように作用するが、周囲のほとんどの人がまだ接種を受けていないときには自分も受けなくていいと思うように作用しうる。これらの性質は、接種を促す効果も阻む効果も、両方持つ可能性があるのだ。

それでは、新規のワクチンという科学技術の人々に受け入れてもらうために、何ができるのか。日本の予防接種がさまざまな法改正を経て、義務接種から「努力義務」になっていることは私も知っていた。努力義務とは、法令で「くするよう努めるべきである」「く努めることが求められる」などと記されている義務のことだ。法令に基づき人々ができる限り予防接種を受けることが推奨されるものの、接種を



強制するものでなく、接種を受けないことによる罰則も存在しない。つまり、努力義務のもとでは、人々が自発的に接種を受けようと思えるような施策が必要とされるということだ。こう考えたとき、自発的な行動変容を人間の意思決定の特性をふまえて後押しするコミュニケーション手法である、ナッジの考え方と共通するところが多いと私は思った。ソーシャル・ディスタンスの確保や感染予防行動の遵守を促すためのナッジの開発研究を行ってきた経験が、ワクチン接種でも活かせるかもしれない。

### 行動経済学者と感染症学者のコラボレーション

私は、「日本の人たちがどれほどの接種意向を持っているのか、多くの人が自発的に接種を受けようと思えるようなナッジはどういうものかなどについて、新型コロナウイルス・ワクチンの接種が始まるより前に研究しておきたい」と共著者である大竹先生に提案した。ナッジはどんな状況でも・誰に対しても常に同じ効果を発揮するわけではなく、環境や対象によって効果が異なることが最新の学術研究で指摘されるようになっていた。だからこそ、どういう使い方なら大丈夫なのかを前もって確認しておく必要があると思った。同時に、「ワクチンの仕組みや効果は高度に医学的なので、この研究を現実の政策にとつて意味のあるものにするためにも、私たち行動経済学者だけでなく、感染症学者と一緒にチームを組めないだろうか」とも相談した。そうして大竹先生から紹介してもらったのが、齋藤智也先生だった。さまざまな専門家が集う政府の有識者会議での齋藤先生の活躍に、大竹先生は感服されていた。幸運にも齋藤先生に参加いただけることになり、私たち三人は、2020年11月に最初の研究打ち合わせを行った。日本で新型コロナウイルス・ワクチンの高齢者向けの接種が始まる、およそ半年前のことだ。

本書は、それからの歩みと成果を紹介するものだ。おそらく「行動経済学やナッジの政策活用」という言葉から一般的にイメージされるものとは随分違ったものをご覧に入れることになるだろう。私たちの政策研究が順調に進んだのか・修正の連続だったのか、現実の感染症政策にとって意味のある研究ができたのか・そうでないのかは、本書を通じて読者の皆さんにご判断いただきたい。私個人としては反省点も多いが、それでも時間や情報の制約がある中で、「的」を大きくは外さずにやり通して、危機に寄り添いながら行う政策研究の一つのカタチを示せたのではないか、と思っている。読者の皆さんがどう感じられたか・皆さんだったらこのような政策研究をどう実践するか、ぜひ、あなたの感想や意見を聞かせてほしい。

本書で紹介する研究プロジェクトは、たくさんの機関や人たちから支援を得て実現したものだ。まず幸運にも、科学技術振興機構のさきがけ制度の「パンデミック社会基盤」領域で、私の研究課題が採択された。資金面の支援だけでなく、総括の押谷仁先生（東北大学）をはじめとするさまざまな分野の研究者と議論を重ねたことで、感染症政策研究としての価値や貢献を引き上げることができたと思う。また、研究プロジェクトの途中から大阪大学感染症総合教育研究拠点に籍を移したことで、より集中して研究に取り組むことができた。感染症やワクチンの基礎研究だけでなく、科学情報の発信や政策提言も重視するという本拠点のビジョンに、私は深く共感してきた。一度獲得した任期なしのテニユア職を放り出して移籍する、という若手研究者としては酔狂な決断をしてみました。そんな私を応援して送り出してくれた、前所属先の東北学院大学の先生方にも感謝申し上げたい。その他にも、日本学術振興会から科学研究費（基盤研究（S・B））、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業、厚生労働

働省から新興・再興感染症および予防接種政策推進研究事業の助成と、経済産業研究所（RIETI）の支援を受けた。

本書では、著者三名で実施した研究だけでなく、加藤大貴氏、黒川博文氏、丹治玲峰氏、中山一世氏との共同研究の成果も紹介している。また、本書の文章は、四名の共同研究者に加えて、経済学、心理学、感染症学、公衆衛生学といったさまざまな分野の研究者に事前のレビューをお願いした。快く引き受けてくださった赤塚永貴氏、石原卓典氏、井深陽子氏、河村悠太氏、南宮湖氏、三浦麻子氏に感謝の意を表したい。中でも、さがげ制度で一緒にしている、感染症学者で医師の南宮氏は、本書全体を通読していただき、大変有益なフィードバックとコメントをくださった。最後に、フィールド実験や社会実装など本書の研究プロジェクトにご協力くださった自治体の皆様、また、私たちの思いを受け止め、出版企画を進め、すばらしい編集をしてくださった日本評論社の尾崎大輔氏に感謝を申し上げます。

本書のうち、第1章から第10章までナンバリングされた本体の大部分の執筆は、佐々木が担当した。「大竹文雄の目」という当時の政策議論をまとめたパートは大竹が担当し、第1章・第3節をはじめとする医学関連のパートは齋藤が担当した。なお、特別な注記のない限り、本書の各章で「私」と表現するときは佐々木・個人を指し、「私たち」と表現するときは佐々木・大竹・齋藤の三名を指す。また、本書に登場する人物の所属や肩書きは、原則として言及している当時のものである。

参考文獻

梅溪昇（2016）『緒方洪庵』吉川弘文館。

緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室編（2015）『緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く』思文閣出版。  
緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室編（2018）『大坂除痘館の引札と摺りもの』緒方洪庵記念財団除痘館記念資料室。  
古西義麿（2002）『緒方洪庵と大坂の除痘館』東方出版。

# 目次

## プロローグ 佐々木周作 (i)

### 第1部 「未知のワクチン」にどう向き合うか？

#### 第1章 「未知のワクチン」に向き合うための基本道具

- 1 ワクチンへの期待と戸惑い (2)
- 2 三つの視点と本書のねらい (4)
- 3 新型コロナウイルス・ワクチンの医学的な特性 (7)  
そもそも、ワクチンとは何か？／ワクチンの種類／ワクチンの効果と副反応／ワクチンの開発と効果検証、承認、実装プロセス／新型コロナウイルス・ワクチンの医学的な特性
- 4 ワクチン接種の法的位置づけ (17)
- 5 経済学はワクチン接種をどう分析してきたか？ (20)  
基本的な枠組み／金銭的インセンティブとナッジ／正の外部性の異質性／ワクチンの最適配分

#### 大竹文雄の目

#### ワクチン導入をめぐる政策議論

有識者会議での政策議論に参加して (35)

2020年8月21日：「ワクチン接種」の議論が始まった (39)

政府が示した議題／ワクチンの効果に懐疑的な専門家／日本の人たちのワクチン接種意向に悲観的な専門家／ワクチンや薬に頼らない感染対策を重視すべきでは？／分科会構成員の最終意見

2020年9月25日～21年2月9日…「ワクチン接種の方針」が決定した(46)

コロナ対策分科会で決定した接種方針／最終的な政府の方針

## 第2部 「未知のワクチン」の接種開始前夜

### 第2章 「接種を受けるつもり」を測定する意義 ーたかが意向、されど意向ー

1 日本の人たちはワクチンを信頼していない？ (54)

ワクチンの「接種意向」を調査する意味／日本の人たちの新型コロナウイルス・ワクチンの接種意向は…？

2 接種意向はどのように測定すべきか？ (62)

3 ワクチンの効果・社会の感染状況・社会の接種状況 (67)

4 四つの問いに対する調査結果 (71)

問い①…日本の人たちの新型コロナウイルス・ワクチンに対する接種意向はどのくらいの水準なのか？／問い②…日本の人たちの接種意向は「社会の感染状況」や「社会の接種状況」に依存して変化するか？／問い③…どのような特徴の人たちが強い接種意向を持っているのか？／問い④…日本の人たちの接種意向は「発症予防効果」か「感染予防効果」かによって変化するのか？

5 ワクチン接種開始前に私たちが手に入れたエビデンス (78)

6 ワクチンの信頼は低いのに、接種意向は高かったのはなぜか？ (81)

### 第3章 自律性を阻害せずに接種意向を高めるナッジ・メッセージの探究

1 ワクチン接種は強制すべきでない (85)

他者の情報を提供するナッジ

2 ナッジとは？ (91)

3 ナッジとワクチン接種 (93)

4 社会比較ナッジの可能性を探究 (95)

なぜ社会比較ナッジなのか？／社会比較ナッジの注意点

5 三種類のナッジ・メッセージ (98)

社会比較メッセージ／利得・損失フレームの社会的影響メッセージ

6 自律性・精神的負担の指標 (104)

7 ナッジ・メッセージは接種意向を高めたか？ (105)

ナッジ・メッセージが接種意向に及ぼす影響／ナッジ・メッセージが自律性と精神的負担に及ぼす影響／高齢層と若年層の違い

8 行政現場での研究成果の実装と発信力強化のために (111)

行政担当者との意見交換会／地方自治体は新型コロナウイルス・ワクチンの情報をどのように発信したのか？

9 意向と行動は違う？…論文投稿よもやま話 (119)

佐々木・大竹・齋藤の「当時は振り返る」エビデンスのつくり方と使われ方

ワクチン接種意向はどう政策に活用されるのか？ (124)

政策研究の実施体制 (128)

こんなに早くワクチンができるとは…… (130)

大竹文雄の目 接種勧奨と出口戦略をめぐる政策議論

2021年6月16日…「青壮年のワクチン接種」について議論した (135)

2021年7月8日～9月3日…「ワクチン・検査パッケージ」について議論した (137)

デルタ株への変異とワクチンの効果

ワクチン・検査パッケージの提案 (139)

「ワクチンパスポート」という表現への懸念／大阪府におけるワクチン接種を通じた出口戦略の議論

2021年11月19日…「ワクチン・検査パッケージ」を基本的対処方針に明記した (146)



分科会における「ワクチン接種率向上策」の議論 (147)  
ワクチン未接種者の四つのタイプ

### 第3部 「未知のワクチン」の接種はじまる

#### 第4章 接種意向は水物か？ ～実際の行動とのギャップ～

- 1 接種意向を持っていた人たちの「行動」 (154)  
新型コロナウイルス・ワクチンの接種意向と行動／不一致が小さくなる事前の接種意向の測定方法
- 2 接種行動の把握 (160)
- 3 意向と行動の不一致はどのくらいか？ (162)
- 4 不一致が小さくなるのはどの測定方法か？ (165)
- 5 不一致を生む要因を探る (166)  
元々接種意向がなかったのに、実際には受けたのは誰か？／元々接種意向があったのに、実際には受けなかったのは誰か？
- 6 不一致をさらに小さくするには？ (171)

#### 第5章 ナッジは実際の行動も促すのか？ ～フィールド実験による挑戦～

- 1 順調な高齢者の接種と若者の接種の先行き (174)  
若者の接種をいかに進めるか？／フィールド実験の立ち上げ／短期効果と長期効果
- 2 ナッジ・メッセージ選定の背景 (181)
- 3 効果を正確に測定するためのランダム化 (182)
- 4 対象年代の決定・当時の状況 (187)
- 5 ナッジ・メッセージは接種行動を促進したか？ (188)

大規模接種会場における接種へのナッジ・メッセージの効果／接種全体へのナッジ・メッセージの効果／ファイザ  
ー・ワクチンの接種へのナッジ・メッセージの効果

6 人々はナッジ・メッセージにどのように反応し、行動したのか？ (191)

7 海外のフィールド実験を再検討する (195)

供給量不足の状況、メッセージの長期効果をチェックする／消極的な人たちへのナッジの可能性

## 第6章 ワクチン接種の意外な効果

1 ワクチン接種と政府に対する信頼 (208)

出口戦略としてのワクチン接種／中央政府への信頼は上昇せず、地方政府への信頼が上昇する

2 中央政府と地方政府の異なる役割 (212)

3 ワクチン接種は人々の政府への信頼をどう変化させたか？ (213)

不連続性と同質性の確認／ワクチン接種が政府への信頼に与えた影響／男女の違い

4 よい政策を立案し、迅速に実装していく好循環を (219)

5 信頼上昇やメンタルヘルス改善の経済的価値 (220)

6 その他の副次的効果 (221)

佐々木・大竹・齋藤の「当時は振り返る」

パンデミック下の研究開発と社会実装

ナッジの研究開発から社会実装へ (227)

状況が移り変わる中で、政策研究を行うには？ (231)

ワクチン・検査パッケージと接種を受けるインセンティブをめぐって (236)

2021年11月16日…「追加接種」の議論が始まった (245)

2021年11月～22年1月…オミクロン株が拡大し、ワクチンの効果が変化した (246)

2022年1～2月…「まん延防止等重点措置の発令・延長」に反対意見を表明した (249)

2022年2月25日…「オミクロン株下でのワクチン・検査パッケージ」をめぐる論争した (250)

2022年3月4日…「まん延防止等重点措置の期間延長」をめぐる論争した (253)

2022年5月23日…基本的対処方針にワクチンの効果の変化が明記された (255)

2022年2～3月…「子どものワクチン接種」について議論した (258)

## 第4部 ワクチン普及後の世界 ～「未知」から「既知」へ～

### 第7章 ブースター接種にナッジは必要か？

1 ブースター接種の意向と行動のギャップ (264)

2 ブースター接種はナッジすべきか？ (267)

### 第8章 ワクチン接種者と非接種者の分断と共生

1 ワクチン接種を受ける人と受けない人 (270)

内集団をひいきし、外集団を差別する／新型コロナ・ワクチンと内集団ひいき

2 どのように実験を行うか？ (277)

3 三度の実験から見えてきた、内集団ひいきの傾向 (281)

パンデミックの最中、接種者は身内ひいきしていた／一方、非接種者には身内ひいきが見られなかった／非接種者が接種者を思いやるのはなぜか？

4 パンデミックの出口に向けてどのように変化したのか？ (286)

5 分断をなくすために、どのような政策が必要なのか？ (289)

佐々木・大竹・齋藤の「当時は振り返る」 ナツジの意味とは ……

パンデミック下でのナツジの役割 (293)

日本特有の事情 (297)

接種者と非接種者の協力可能性について (300)

政策研究のアジェンダの発信 (304)

## 第5部 ネット・パンデミックのために「行動経済学＋感染症学」ができること

### 第9章 将来のパンデミックに向けた10の政策研究アジェンダ ……

1 行動経済学＋感染症学の政策研究アジェンダの提案 (308)

2 パンデミック発生前の政策研究のアジェンダ (311)

3 パンデミック発生後の政策研究のアジェンダ (315)

### 第10章 政策研究アジェンダの「実現可能性」を議論する ……

1 では、どうやるのか？ (318)

平時・有事にどんな調査を行うべきか？／ナツジ・メッセージの開発と検証はどう進めるべきか？／治験参加への忌避感をどう探るか？／社会の状況や政府の発信から、人々はどう影響を受けるか？

2 政策研究のアジェンダはちゃんと機能するのか？ (329)

「発生前」政府が研究アジェンダを提示することが重要／「発生前」研究者不足の問題にどう対処するか？／「発生前」学術業績につながりにくい「政策研究」に、誰がどう取り組むか？／「発生前」政策現場での実践報告をきちんと評価するには？

3 もしも次のパンデミックで「子ども」の死亡率・重症化率が最も高くなったら (336)

優先接種の順番をめぐる社会とのコミュニケーション／対象者の解像度を上げて考える

あとがき 大竹文雄 (343)／齋藤智也 (352)

## コラム一覧

- ① インターネット調査の使いどころ (70)
- ② ランダム化比較試験とは (99)
- ③ 自己申告の接種歴データの正確さ (160)
- ④ EBP MとPBE M (185)
- ⑤ オンライン実験とフィールド実験の強み・弱み (193)
- ⑥ 風しん抗体検査とワクチン接種促進のためのナッジ・メッセージ (201)
- ⑦ 長期化するパンデミックにおける因果推論 (223)
- ⑧ 経済学とアイデンティティ (273)

## 著者紹介

### 佐々木 周作 (ささき・しゅうさく)

大阪大学・感染症総合教育研究拠点・特任准教授

1984年生まれ。大阪大学にて博士号（経済学）を取得。専門は、行動経済学、実験経済学。

行動経済学会の副会長とともに、中央府省庁や地方自治体のナッジ・ユニット等では有識者委員やアドバイザーを務める。三菱東京UFJ銀行（現・三菱UFJ銀行）行員、京都大学大学院経済学研究科特定講師、東北学院大学経済学部准教授等を経て、2022年より現職。

### 大竹 文雄 (おおたけ・ふみお)

大阪大学・感染症総合教育研究拠点・特任教授

1961年生まれ。大阪大学にて博士号（経済学）を取得。専門は、行動経済学、労働経済学。

新型コロナ・パンデミックでは、政府の新型コロナウイルス感染症対策分科会、基本的対処方針分科会等に参加した。著書『日本の不平等』（日本経済新聞社、2005年）ではサントリー学芸賞、日経・経済図書文化賞、エコノミスト賞を受賞。2006年に日本経済学会石川賞、2008年に日本学士院賞を受賞。大阪大学社会経済研究所教授、同大学大学院経済学研究科教授等を経て、2021年より現職。

### 齋藤 智也 (さいとう・ともや)

国立感染症研究所・感染症危機管理研究センター・センター長

1975年生まれ。公衆衛生学修士（ジョーンズ・ホプキンス大学ブルームバーグ公衆衛生大学院）、医学博士（慶應義塾大学大学院医学研究科）。医師。専門は、公衆衛生危機管理、バイオセキュリティ。

新型コロナ・パンデミックでは、厚生労働省新型コロナウイルス感染症対策アドバイザーボード、東京オリンピック・パラリンピック競技大会における新型コロナウイルス感染症対策調整会議等に参加した。厚生労働省厚生科学課健康危機管理対策室で東日本大震災への対応等公衆衛生危機管理、結核感染症課で新型インフルエンザ対策等に従事。2021年より現職。2023年より、新型インフルエンザ等対策推進会議委員も務める。

こうどうけいざいがく みち む あ  
行動経済学で「未知のワクチン」に向き合う

2025年1月15日 第1版第1刷発行

---

著者 佐々木周作

大竹文雄

齋藤智也

発行所 株式会社日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4

電話 03-3987-8621 (販売) 03-3987-8595 (編集)

<https://www.nippy.co.jp/> 振替 00100-3-16

印刷所 精文堂印刷

製本所 難波製本

装幀 図工ファイブ

---

検印省略

© Shusaku Sasaki, Fumio Ohtake, Tomoya Saito 2025

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

Printed in Japan ISBN 978-4-535-54074-3



<(社)出版者著作権管理機構 委託出版物>

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088、FAX 03-5244-5089、e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。また、本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャン等の行為によりデジタル化することは、個人の家庭内の利用であっても、一切認められておりません。